

# サッカーの活動における暴力根絶に向けて

## 「差別、暴力のない世界を」

昨年9月に実施した「JFA リスペクト フェアプレー デイズ 2014 差別、暴力のない世界を！」キャンペーン(9月5日～14日)の一環として、各種大会や各都道府県サッカー協会と連携してさまざまな取り組みを実施してきました。

この取り組みはキャンペーン後も外部団体との協力などを通じて、「差別、暴力のない世界を」

つくるべく活動を継続しています。その一環として、JFAは法務省の全国中学生人権作文コンテストを後援することとなりました。このコンテストを通じて、多くの中学生に豊かな人権感覚を身につけてもらえればと願っています。

今回は、第34回全国中学生人権作文コンテストの受賞作品をご紹介します。全国の中学生

約95万人の応募の中から受賞した作品です。2020年に東京オリンピック・パラリンピック開催が決定し、われわれは海外からのゲストや障がいを持つゲストなど、さまざまな方を日本に迎えることとなります。多くのゲストの方が快適に、楽しく滞在できるように、われわれができることをサッカー界、スポーツ界で行っていききたいと思います。

### 法務事務次官賞 手伝えることはありますか

神奈川県 厚木市立荻野中学校3年 坂 碧人(さか あおと)

「俺はやればできる子だから。」

父は笑いながらそう言います。

三年前、父は仕事上の事故で怪我をしました。会社からの連絡を受け、母、弟、私で病院へ行くとそこには、ベッドに横たわり、一人涙を流す、右手を失った父の姿がありました。初めての父の涙に私は、戸惑い、不安さえ覚えました。しかし、ふと冷静になった私は、「家族が障がいを負ったのだから、自分が身の回りの事を全てやってあげなければならぬ。それが最善である。」そのときは、そう思っていました。

それから、私は、積極的に父の手伝いをするように心がけました。お風呂の時に背中を洗う、ペットボトルのキャップを閉める、そして、靴ひもを結ぶ。大変だとは思いましたが、それ以上に、「自分は良い事をした、感謝されている。」という、幸福感がありました。

しかし、父と行動を共にすることに対して、最初は多少の抵抗がありました。なんといっても、隣りを歩いているのは右手の無い人なのです。義手で隠すといっても限界があります。シリコンでできているため、人の肌の質感と違いますし、なにしろ指が動かないため、一つ一つの動作が不自然になってしまうのです。ですから、父の手伝いをして極力手を使わせないことは、他の人に義手であることを気付かれないために必要なことで、私だけでなく、父のためでもある。そうさえ思っていました。

ところが、これらの私の考えは、完全に間違えていると気付かされる出来事がありました。

ある日、家族で買い物をしていたときのことで。私は、父の靴ひもがほどけていることに気が付きました。そこで私は、いつもと同じように結ぼうとしました。が、しかし、予想もしていなかった言葉で父に断われました。

「俺はやればできる子だから。」

父は、そう笑って言いわけ、実際にやりとげました。どう結んだのかは分かりませんが、そこで私は気付きました。今までの行動は良心ではなく、単なる押し付けだったのです。

そもそも、「やってあげなければ。」という考え自体が恩着せがましく、そこから得た幸福感など、ただの自己満足だったのです。確かに、助けられた父は楽ではあったかもしれませんが、私達家族がいつでも近くに付いていられる訳はなく、父が一人でやらなければいけないこともたくさん出てくるのです。それに義手であることを隠そうとするのは、私が周りの目を気にしているだけであり、むしろ父の存在を否定してしまっていました。父には本当に申し訳ないことをしてしまったと今では反省し、二度としてはいけないと強く思いました。

しかし、確かに、「やればできる」父は、自ら様々なことに挑戦していました。その一つとして、「アンブティーサッカー」という障がい者スポーツをやっています。フットサルのようなルールで、

足のないフィールドプレイヤーと手のないゴールキーパーによって行われます。そのスポーツを始めてから、父と私で過ごす時間が増えました。その時間とは、サッカーのトレーニングをする時間です。私もサッカーをやっているため、共通の部分があり、大切な時間となっています。

しかし、それ以上に父にとってプラスになっていると思うことは、アンブティーサッカーの仲間と、辛さや心身の痛みを分かちあえているということです。そのお陰か、父の表情が以前より明るくなり、怪我をする以前のような、明るい性格に戻りました。

先日食事に行ったときも、失った右手を通して、無邪気な小さな子供と触れ合っている姿を見て改めて、「偏見」というものをなくしていかなければならないと思いました。

父に関する体験を通して、私は障がいについてとても考えさせられました。「一切の偏見を持たず、相手の気持ちを考えて、できることには手出しをしない。」様々な体験をした結果、私はこのように考えました。これを守ることは、その人に生きる活力を与え、居場所を奪わずに済みます。「やってあげる」、ではなく、「手伝えることはありますか」、そう声をかけることが大切だと思います。

「俺はやればできる子だから。」その言葉の意味を重く受け止め、差別のない社会作りに私は少しでも貢献していきます。

引用：法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催 第34回全国中学生人権作文コンテスト受賞作品より